V　富士市の自然環境診断
Diagnose der natürlichen Umwelt in der Stadt Fuji

太平洋に面した駿河湾海岸沿いの田子の浦砂丘植生，クロマツ林から沖積低地，台地，山麓，さらに古い火山である愛鷹山，越前岳（1,505m），位牌岳（1,458m）などの急峻な渓谷および山地から日本最高の富士山頂近くに至るまで多様な自然環境に対応して多彩な自然植生が配分されていた。しかし，最初に人間が富士山麓に定住した石器時代以来，長い時間をかけて，はじめはゆっくりとした火入れ，伐採，局地的な開墾が行なわれてきた。その後，次第に人間の自然に対する対応技術が進むにしたがって速度をはやめて富士市の自然環境，その主役である自然植生も，自然の顔を変えられてきた。とくに，かつての東海道沿いの富士川，潤川の三軒屋，鮫島，東田子ノ浦などの海岸からさらに吉原，袖木，川尻，船津などの古くから栄えた低地集落部および，その周辺の水田，畑の農耕地をはじめ，低地から台地，丘陵さらに富士山の山麓に向かって，人間活動がおよんでいった。もともと富士山麓の広大な山足部は富士の巻狩に象徴されるように古くから狩猟場その他として野焼きが行なわれてきた。さらに明治この方，人口が急激に増えるにしたがって木造建築に主に生活している住民の住宅建設増大その他による木材需要の急増に対応してスギ，ヒノキ，次いでカラマツなどの針葉樹の植栽が急速に進んできた。富士の裾野においても最近まで一部の残存自然植生域を残して広くスギ，ヒノキの植林地あるいは海抜 1,400m 以上のところになるとカラマツの植林が行なわれている。海抜 1,400m 以上の高い現在の富士スカイライン，表富士周遊道路が横断している附近から上部になるとシラビソ，オオシラビソ，カラマツ林が良く残されている。1707年に噴火した宝永火山（2,702m）から噴出したスコリアなどの動き易い不安定な立地には，自然植生はフジアザミ，オンタデ，フジハタザオ，ミヤマオトコヨモギなどの荒原性の草本植生や低木がまばらに生育しているにすぎない。さらに富士市域は，しだいに面積が細くなってくる海抜 2,800m 以上の高地ではほとんど植生が発達していない。いわば裸の大地がそのまま露出している状態である。富士山の中腹以上の植生は比較的長い間，自然植生あるいは自然に近い状態で維持されてきた。この主な原因の一つは富士山が，日本の聖なる山として，山岳宗教の重要な対象となっていた。したがって今日なお，富士登山する人たちは，白い衣に身をまとって登っているほどである。しかし，明治 100 年この方，急速な産業の発展，人口の増加，交通網の発達によって聖なる山として残されてきた富士山の山腹部はもとより，その周辺低地部に数多くのパルプ工場をはじめ各種の産業が発展してきた。とくに富士市では交通施設に例をとっても，国鉄はかつての東海道線に新東海道本線，道路でも，東海道線（国道 1 号線）に対しても東名高速道路さらに富士市は隣接市を含めて表富士周遊道路の他に富士山の西側をとりまいて富士宮市，朝霧公園さらに本栖湖，山梨県へと続く南北道路が国道 1 号線などの東西道路に垂直に接し，重要な交通要路となっている。富士川，潤井川ならびにその支流沿いの低地は，

Fig. 66　富嶽三十六景の駿州大野新田（現在の浮島ヶ原）の絵（江戸時代）。
Ein altes Bild vom Ukishimagahara-Flachmoor (Fugaku-Sanjurokkei in Yoshiwara, Edo-Zeit).

かつて豊かな水田，さらに一部富士市の東部須津川下流，沼川沿いには現在なお特異な湿生植生景観を演出している浮島ヶ原がある。浮島ヶ原は江戸時代までは大きな水たまりを形成し，鯉，鮒，鯰などの魚や渡り鳥が住んでいたといわれる（三十六景吉原の絵参照）。しかし，現在このような沖積低地はしだいに埋立てられて住宅や新しい産業立地となっている。とくに，日本でもっとも製紙業の盛んな富士市においては冬は蒸気がそのまま，白い湯気となって立ちのぼっている。したがって富士市の数多くのパルプ，製紙工場の高い煙突から白い息をはき，それを遠望する富士山の景観は，新しい文明，それを支えている産業立地と昔から自然の状態で存続している富士の山頂とみごとな調和を示している。

本来，海岸から，沖積低地，台地，丘陵，山麓部，山腹さらに富士山頂に至る海抜高度，溶岩流のながれ，地下水位や河川の流路に対応して，みごとに配分されていた富士市固有の自然環境を形成していた自然植生は現在では，急速に消耗を強要されている。日本の他の地方と同様に富士市においてもかつて新しい町づくり，集落づくりには必らず，土地の中心地，あるいは人の顔にたとえれば眼に相当する弱い自然のところは残し，守り，その土地本来の広葉樹を植栽して，ふるさとの森を形成してきた。それが富士市各地に残されている多くのいわゆる鎮守の森や寺院の森，同様に斜面などの森でもある。このような富士市民の先祖が長い間残し，守り，育ててき

た植生，さらに潤井川，赤渕川，須津川ぞいの渓谷沿の急斜面にもウラジロガシ，アカガシ，場所によってはシラカシなどのカシ類を中心にした照葉樹林によって固有の渓谷景観を形成している。しかし，海岸のクロマツ林から沖積低地のダブノキ林，台地状のシイ林，丘陵部のアラカシ，シラカシ林からもっともきびしい急斜面の尾根筋のモミ林，イロハモミジ―ケヤキ群集の針葉樹や夏緑広葉樹が優占している自然の緑も新しい現代の開発の波のもとに，今や急速に改変，消耗を強いられている。

しかし，われわれが富士市の全域をきめ細かく現地調査した結果，その植生調査資料も示すように富士市は一方においては古くからの開発，最近の製紙業はじめ産業やそれを支える技術の発達にもかかわらず静岡県下はもとより，中部圏においても，日本全体からみても比較的，都市部や集落の中やまわりにも本物のタブノキの森やシイの森，内陸の斜面ではウラジロガシ，アラカシの照葉樹の森が残り，守り，育てられている。このような富士市民の祖先が過去から現在まで少し遠慮しながら郷土の樹種ともがまんしながら共存してきた。この古くて新しい人類の文明を築くための英知をもっているとすれば，その英知は今や富士市の中でも忘れられかけている。しかし，ヒトの眼に相当するような人為的干渉に敏感な急斜面，水ぎわ，尾根筋は積極的に将来のために自然保護を行なう。それは単に従来の一部の方たちの住民運動，その他によって今，ある樹林，残存自然植生を残すことだけでは不十分である。 R. Tüxen（1956）の主張する無限の可能性を秘めた現代の分析的な科学でもほとんどわかっていない未知の要因を含めたあらゆる環境の総和を植生が指標する潜在自然植生を基本にした積極的な生きた構築材料を使いこむことが重要な課題となる。今ある自然植生あるいは比較的自然に近い植生や生物共同体を出来るだけ残し保全していく。同時に，すでに都市や産業施設周辺のようなふるさとの森が開発によっても完全に消耗しつくされたところでは積極的に潜在自然植生図を科学的な生きた処方箋として，小さくても大きくなる幼苗（ポット苗）を富士市の各地域に応じて使いきることが必要である。富士市の植生調査結果から卒直に云えることは，たしかに富士市でも新しい文明や技術の急速な人間圧のもとに残存自然植生や自然度の高い代償植生，その立地までが日本の他の地域と同じように開発，消失を余儀なくされている。しかし，全国的にあるいは首都圏や中部圏の太平洋側との対応でみるときに，まだまだ富士市には21万の市民が孫子の代まで生きてゆけるための最低限の生存環境，遺伝子プール（geen pool; ジーンプール，Löve 1977）となる自然植生は，かなり残されているのは幸いである。

しかし，すでに全市域のわずか6％しか残されていない自然植生，残存半自然植生を守るだけでは不十分である。われわれの祖先がどのようにして緑を育ててきたかを見なおし，同時に都市砂漠化した，また危険性のあるところは，どのようにして持続的な人間の生存環境の基盤，地方の文化の母胎としての本物の生きた構築材料を使いきるか。これが明日に発展する企業，地域住民そしてプロデューサーとしての行政当局のきわめて重要な課題であり責任であるともいえる。

さいわい富士市には，まだまだ首都圏の東京湾沿い，あるいは中部圏の名古屋湾沿いなどに比

べると豊かな自然環境，それを支えている残存自然植生，ならびに自然に近い雑木林も含めて，代償植生も豊かに残されている。したがって現在残されている自然環境と，その生きた主要構成要素としての残存自然植生，とくに社寺林，斜面林，古くから残されている集落林，屋敷林，住宅林も全市民の共通の生存の基盤，後世に残しうる生きた遺産としていかに残すかが今後の大きな課題となる。